

G.R. 白雲郷

とりお



14

昭和45年 4 月 1 日



このころ この身 このくらし

探題 大僧正 塩入亮忠猷下 御筆 (川越喜多院)

最近では集团的圧力で政治を曲げようとする傾向もあり、むづかしい世の中ではありますが和を以って、まるく、明るい暮らしが出来るようにしたいものです。

目 次

表紙画	中谷健次 画伯
◦ G & R 白雲郷	1頁
◦ 印度附近の旅路(その四)	3頁
◦ 大観音建立	9頁
◦ 西遊記(その九)	11頁
◦ ゲバ棒と仏教	15頁
◦ 行事のあらまし	19頁

白雲郷



激務の余暇 鉦や鎌を持って白雲郷の赤（R）
みどり（G）を育てている開祖

私が白雲山鳥居観音の建立を始めてから三十年の歳月を経ております。

併し建築物は将来修繕等の維持が大変なので鳥居観音の建物は最小限度の模倣的な設計としましたが、只境内の整備には努力し続けてまいりました。

白雲山の境内は僅かに五十町歩位の小さなものです。故鬱蒼たる原始林の大公園のまねは出来ないのです。ような考えでやっております。

名栗は西川林業地として徳川時代から発展しており柱材の生産が主目的なので三十年前後で伐採してしまします。私はこの永い歴史のある西川林業の林相を永久に保存したいと思ひ、皆伐することが出来ない保安林の寺領としました。そしてその間を、つつじ・もみじのように美しい花の咲く木や紅葉で一杯にうめつくして、Green（緑）とRed（赤）の小じんまりとした目を楽しませる小公園にして、スモッグ等になやみつがある都市の方々の健康とレジャーに役立つようにしたいと念願しつつ花や紅葉に邪魔する雑木や蔓を伐り除くことを三十年間つづけてまいりました。

私は日曜日等郷里に行き早速鉦や鎌を持って境内に入、りその不用な雑木を取り除く作業に従事しつづけたのです。時にはおかしなこともありました。私に逢



ようやく赤と緑で美しく育ってきた白雲郷

いたいと云う人が来て私が境内にいと聞き、山に登って来て私に逢い「頭取はどこにおられるでしょうか」と言われ、私もめんくらしい、ちょっぴりいたづらっ気を出し、とぼけて「広い山の中ですからどこにおられるかわかりません」と答えると、その人は、「そうで

すか」と山の奥の方へ登って行きました。私が山男そっくりな、いでたちなのでわからないのです。あとで庫裡で面会して、お互にあやまって大笑いでした。

こうして永い年月愛育した樹木を、引抜いて持ち帰ったり棒でたたき折ったりして荒しまわる公德心のない人が多いので、とうとう止むを得ず数十万円かけて鉄條網をはったり、入場料を頂いて酔っぱらいや乱暴する人を入山させないように苦心しましたので幾分樹木は保護されて来ましたが被害はなかなかあとをたちません。このなやみは、どこの観光地でも同様な程日本人の公德心は世界中最もひくいように思われるのはなげかわしいことです。

併し、このつつじやもみぢなども年月かけて可愛がって来たおかげで、近年は春の花・秋の紅葉と段々美しさを増して目を楽しませるようになり、G&Rの白雲郷にふさわしい境内になりつつあります。

どうかみんなの慰安のため、これらの樹木を大切にして下さい。お頼み申します。

私の彫刻する仏像の木材は白雲山境内の老木（松）を使用しているのです、この仏像に対する因縁も深いものがあると思う度毎に、これらを残して下された祖先に感謝しております。



印度附近の旅路

(其の四) 桐江

デリー

前号では玄奘法師げんじょうほうしの旅行記の一部を書きましたが、十日目の十一月四日、漸く飛行機で印度の首都デリー



堂々たる風采のシーク族のドアーマン

に着き、有名なアショカホテルに到着し、始めて、ゆっくり入浴することが出来ました。ホテルの入口で、前に書いた勇敢なシーク族

の大男が、頭に白いターバンを巻き立派な髭ひげを生やし堂々たる姿で出迎えたのには、先づ目をみはりました。

デリーは近代的な立派な都市であるニューデリーと歩道に印度独特の家なき沢山の人々や牛がのさばっている昔ながらのオールド・デリーの二市が隣接しているのも面白く興味深いものがあります。

この附近は印度中心であるため王宮・古城が沢山ありますが、その一部を書いてみます。

ガンジーとネールの墓

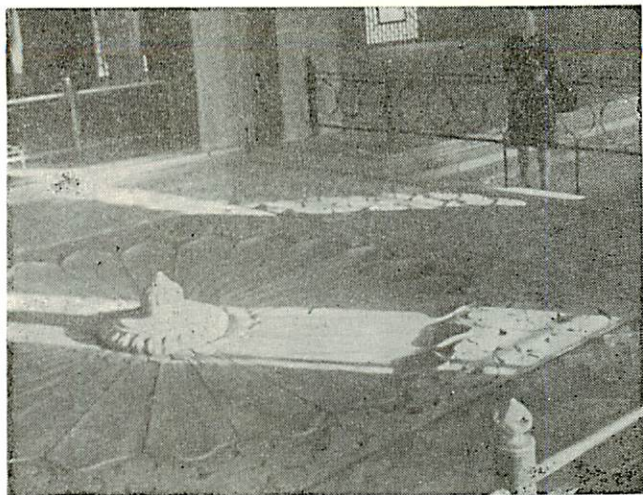
ガンジーとネールの墓の附近は前回旅行の時とは大分変わって立派な公園となり、猿廻しや大道芸人もいて見違えるほど整備され、墓参の観光客で大変賑わっております。

赤い城（レッド・フォード）

赤い城の名の通り、赤い石で建てられた広大な城廓じょうかくが目に残っています。

城内の宮殿は総大理石で建てられ謁見の間は、金銀七宝しちほうなどで善美を尽した豪華なものであったのですが、今ははぎとられて形だけになっております。

しかし、その当時の華麗さは、私どもの想像も及ばないものであったということが、そこに「地上に極楽ありとすれば、ここにあり。他にあらず」とベルシャ語で刻まれていることによっても、当時の面影が私たちなりに思いしのばれました。



池 水 噴 の 中 城 の 赤

また、大理石で六・七米ぐらいの蓮の花弁の開いた形の彫刻の浅い池があり、中央から噴水の水が花卉に添って八方に小波をたてて流れ落ちて涼をとる室があるかと思えば、城内の女人は外部に出ることを許さず、そのための女人専用の覗き窓があり、今はその窓から、はるか市中が見られるという夢幻的な建築デザインに感心しました。

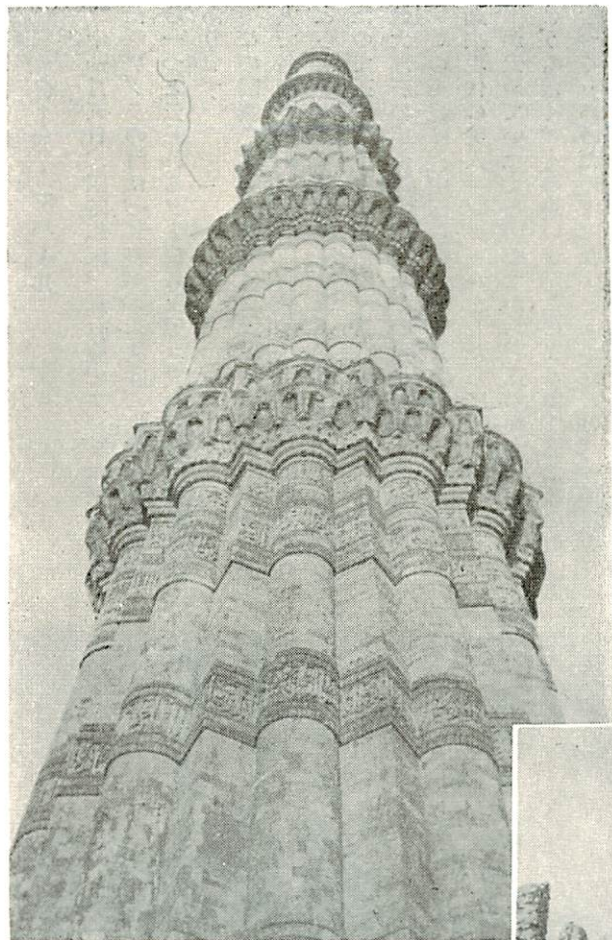
クトプ・ミナール

クトプ・ミナールは、高さ七十二米もありデザインが美しく華麗精緻な彫刻が全部ほどこされておるのは最も私の参考になりました。

この塔は、アクバル王が勝利の記念に建てたもので二十二年間も毎日二万三千人の労働者を使役したと云われるしろものです。周囲に土を積んでは彫刻した石を積みあげ、これをくり返して七十二米の塔を作ったということです。周囲の土を取り除くだけでも大変なこと、エジプトのピラミッドにも劣らぬ大ミナールであります。以前はこの塔に登ることが出来たのですが、高い所から飛び降りて自殺する人が多いため、今は登ることは止められております。

ここの王城もなかなか美しい凝った彫刻で覆われて

おりませんが大分破損しております。
その中央にチャンドラ王の作った直径四十センチ、高さ七米の鉄柱があり、それには王が勝利を記念するサンスクリットの銘文が刻まれておりますが、千五百年経っても錆が少しも出ていない純度の高い鉄柱です。



華麗精緻な彫刻が見ものである

4000年前の鉄の柱



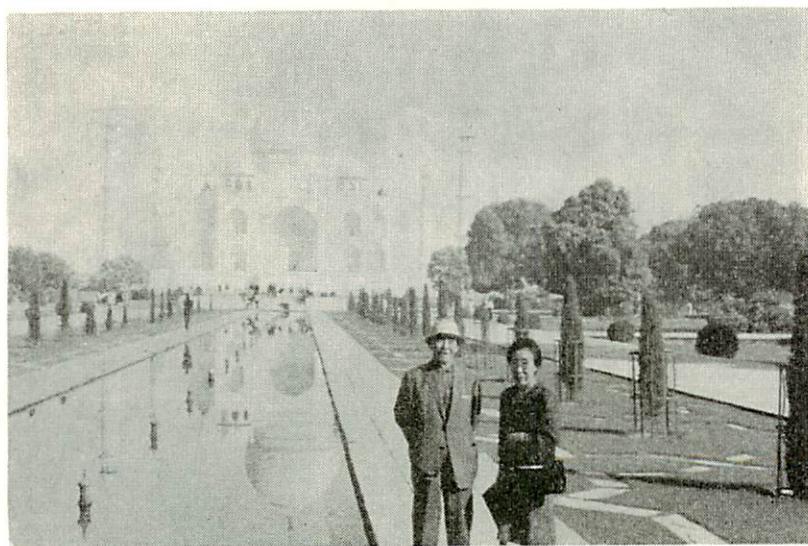
タージ・マハール

十一月五日、四時起床、飛行機でアグラに飛びました。アグラの町はづれのヤムナ河畔に世界七大建築物の一つと云われるタージ（王冠）マハール（宮殿）があります。

この回教式建築の寺院はシャー・ジャハン大帝が美人で名高い王妃が死の直前「私亡き後は、他の妃をめとらないで!! 美しい墓を造って下さい!!」と懇願したので王は、十七年間もの年月と国費をかたむけて、総大理石の実に雄大華麗なこの建築を完成しました。

この王妃は、中国の楊貴妃も及ばないほどの美人で過去現代の美人コンクールをしたらNo.1だろうとガイドが云っていたくらいですから、王の嘆きは、たとえようもなく、その思いが、このように美麗な墓の殿堂をつくりあげたのではなからうかなどと、つい我を忘れて見入ってしまいました。

中に入りますと中央に王妃の立派な棺があり、王の棺は、その右横にあるのですが、宝石の象嵌でうづめつくした二個のお棺を安置した室のまわりは、大理石の総透し彫りが八角にめぐらされて、光線がさし込み美しいお棺の宝石がキラキラと輝いておりました。



世界七大建築物の一つといわれるしょうやかな建物

タージ・マハールの夜景

満月のタージ・マハールは、最も美しいとのこと
で、丁度満月の夜にめぐりあい案内してもらいました。

ヤムナ河のゆるい流れに沿うて見渡す限り大平原の
中にくっきりとそびえ建つ白亜の巨大な美しい建物は
明月に照らされて明暗による神秘的な情景で折柄ラジ
オが印度式の哀調あるメロディを流して来て私共を一
層幽玄の境地にさまよわしめました。

建物に近づいて見上げると、磨きあげた大理石の彫
刻の間が鏡がはめ込んであるかのように、月光に輝き
歩くに従い、星かとまごうばかりにキラキラとマタタ
クように変化し移動する美しさは、今も目にやきつい
ております。

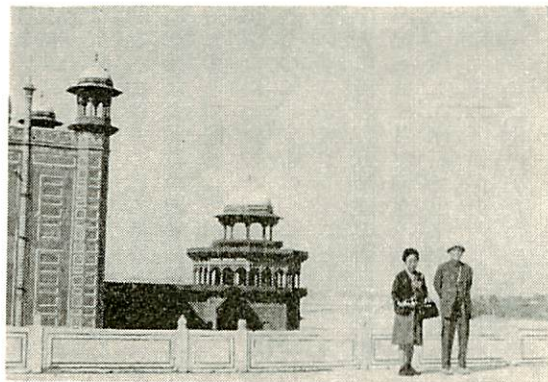
アゲラ城

この王に四人の王子がありますが、父王が病気になる
と聞いて、上の三人は城外で王位をめざして戦い
三人共戦死したので、末弟のアクバルが王位を継いで
父王をタージ・マハールのよく見えるヤムナ河畔にあ
るアゲラ城の一室に幽閉してしまいました。

父王はタージ・マハールの対岸に自分の陵墓を妃と

同形のものを造って、両者を橋で結び合おうという夢を
持っていたが、果すことが出来ず、遂にアゲラ城に幽
閉されて、妃の墓のタージ・マハールを眺めつつ死ん
だのですから、嗚々残念で、感無量のものであったで
しょう。

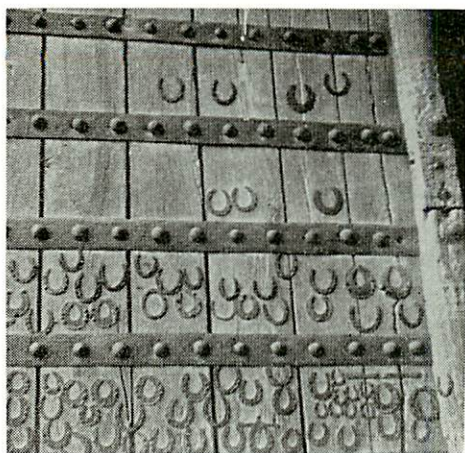
タージ・マハールに妃の棺の右横にまつられている
のもそのためです。



王が幽閉されたという所

このアグラ城はヤムナ河畔に接し半円型の二重の城壁にかこまれ周囲一哩半もある大城で、入口の橋も鉄の鎖で巻き揚げ、おろすことが出来るようになってい
ます。

城内の建築物も実に広大壮麗すうれいなことは、デリーの赤い城に勝るぐらいであります。



アグラ城門の馬蹄の扉

ファーテブル・シークリー城

アグラの西方にファーテブル・シークリー城があり

周囲六哩という巨大なもので、アクバル帝が南印度に遠征し大勝したので築城したと云われます。ファーテブルとは、勝利の門のことで、城門の扉に、功績のあった馬の蹄ひづめを沢山はりつけてあるのが、印象的でした。

中央に立派な大理石の聖者の靈廟れいびやうがあり、周囲は大理石の透し彫りで囲まれております。アクバル大帝には、子供がなかったのを、この聖者の祈禱により男の子が生れたので、大帝は、この聖者を神の如く尊敬していたということです。

城内中央に美しい五階建の面白い建物があり、かつて大帝が妃と共に月を仰ぎ涼風を楽しんだ所だそうです。また、屋上に赤石で出来た十米ぐらいの碁盤があり、中央に大帝の玉座があります。碁石は、色とりどりの服装をした沢山の美女たちにつとめさせ、延臣と碁を楽しんだ跡だそうです。

但し、この大城も水不足のため七年で引き払ってしまつたようですが、よく保存されています。

城門の外に出ると一六二フィートの壁上に裸の男が立って、手を振っております。見物人が集ると下の水槽めがけて、飛び込んだのには、全く驚きましたが、早速、私も集った者たちのところに来て、見料を請求しておりました。

合掌 (以下次号)

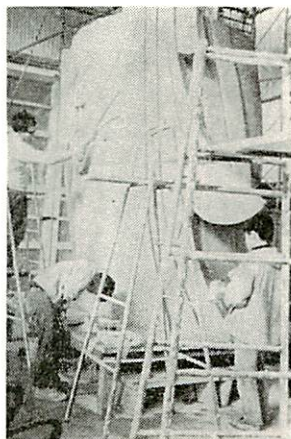


大観音建立

私は数年前、二回にわたり印度・中近東・地中海沿岸の国々の数千年前の古跡や古寺院を巡拝したことにより、非常に心を引かれたのであります。そこで、白雲山の最景勝地 面白岩（四八〇米）の台地を選定して、この旅行で得たいろいろの面を生かして、大観音を建立することを発願したのは、この高い山頂である霊地から普ねく世間をみそなわして、偉大なる大慈大悲の威神力により衆生を済度し、この不安な世相を是正して、平和な国土・萬民豊楽をこいねがう一途の念



屋上大観音の原型の6分の1がようやく出来る。



アトリエで原型を六倍に引き伸ばす大がかりな作業。

願からであります。

基壇の堂宇は、巾十米、長さ三十米、高さ十米で中近東の古寺院をまねた建築とし、その屋上に観音像・中央（二十三米）と両脇立（十二米）二体を安置いたします。高崎観音は四十米余、東京湾観音は五十米余ですから、その約二分の一にすぎませんが、屋上に建立することは、建築上、非常に難問題があるのですがよく業者がこれを克服してくれました。

観音のお脇立ちは、梵天・帝釈天で、鎧を着て巻物と独鈷を持っておられるのが普通ですが、この高所にささえもなく建てることの困難さから、合掌の手印といし、天衣を長く引きましたので、三観音のように見られますが、合掌の梵天・帝釈天も、昔の例がありませんので是・非は、ご覧下さる方々のご判断におまかせ

いたします。

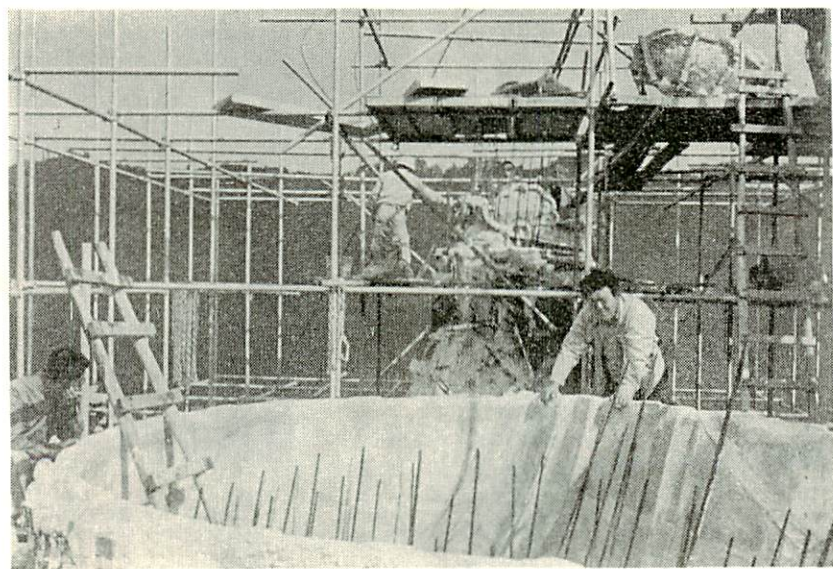
原型は、六分の一（中央観音）四米余を江古田のアトリエで作りました。

これを三信工業が、昭和四十三年三月に請負ってくれ、早速、高い大きなアトリエを建てて、原型を六倍に引き伸ばすので、三米ぐらいついに区切って粘土造りしたのです。

こんな大きなものを粘土で拡大製作したのは、日本では初めての試みであるとして彫刻界では、話題となっているとのことでした。

この三体の雌型めすがたの完成には、十名くらいの先生方や多数の美術学校生徒のアルバイトで、一ヶ年を要しました。私も、これの修正に度々足を運びましたが、何しろ大きくて、遠方から見ることが出来ないのです、これを山頂に組み上げて見ないうちは、良否はわかりません。名栗の白雲山に起工したのは、昭和四十三年七月六日からですが、何しろ山頂なので、材料の運搬の困難とか冬は勿論、風雨にも被害されて、工事は困難を極めておりますが、この五月九日には、上棟式をしますが、完成には、まだ二ヶ年近くを要すると思えます。

何卒五月の上棟式には、ご参列下さいまして、ご批判、ご指導を承りたいと祈念致しております。（合掌）



建 立 工 事 現 場



西遊記

(その9)

五行山

観音さまは、竜をかわいそうにおもい、すぐさま、天上へのぼって、玉帝に、竜の命をたすけてやってくださいとたのんだ。

観音さまのおかげで、竜の命はたすかり、白い馬にすがたをかえられた。

「白馬よ」

観音さまは、白馬の首を、やさしくなでながら、

「命がたすかってうれしいと思つたら、ひとつはたらいておくれ、よいか。天じくへお経をとりにいける者がここへきたら、おまえはともをして、その方をのせていくのだ。」

「はい、よくわかりました。」と、白馬は、たてがみをふってこたえた。

観音さまと行者は、また、旅をつづけた。すると、はるかゆく手に山がみえてきた。観音さまは行者に、

「あれは、なんと云う山だろう?」

行くてに見える小高い山。そこは孫悟空がとじこめられている山なのである。

「五行山といえます。」と、行者はこたえた。

「おお、すると孫悟空のいるところか。どうしているか気にかかる。いつてみてやろう……」

ふたりは、その山へのぼっていった。石の箱の中の孫悟空は、ふたりのすがたを見ると、気がいのようによるこんだ。

「観音さま! 行者さま! 孫悟空です、おひさしぶりでございます。よくおいでくださいました。わたしをたすけにきてくださったのですね!!」

「いや、そうではない。」

観音さまは、しずかになだめるように、

「今日は、まだたすけるわけにはいかない。だが、ちかいうちに、ここを、ある方がとおる。その方は、おしゃかさまのおいつけで、天じくへお経文をとりに行くのだ。おまえを自由にしてくれるのはその方だ。」

「観音さま、その方がおいでになるのはいつでございます。わたくしは、おしゃかさまにいわれたとおり、五百年の長いあいだしんぼういたしました……」

孫悟空はしんけんだった。

「まだ、はつきりとはわかっていない。けれども、近

いうちだ。もうすこしのしんぼうだから、おとなしく
まつがよいぞ。」

観音さまは、悟空をなぐさめて、また東にむかって
旅をつづけた。

白　い　馬

毎日の旅で、観音さまと行者のきものは、色がさめ
汗と、ほこりによごれ、まるで、こじき坊主のよう
にみすぼらしくみえるのである。

二人は、そんなみなのまま、長安の町についた。
長安は唐のみやこで、皇帝のすむ国中で一ばんにぎや
かなところで、立ちならぶ家の間の大きい道はいつも
行き交う人でにぎやかである。その日はことにぎや
かで、大勢の人が声をあげながら、町の一方へ走って
いくところである。

「もしもし。」と観音さまは、一人の人をよびとめて、
「なにか、かわったことでもあるのですか。」

ときくと、その人は、

「旅の方は、何にも知らないのですね。皇帝さまが、
大法会だいほうえ（法会とは、多くの人をあつめて、ほとけのお
しえをとききかせること）をなさるので、ゆうめいな
坊さんが、国中からあつまってきて、ありがたいほと

けさまのおしえをきかせてくださるとのことです。わた
したちは、ききにいくところです。」

と云って、いそいで、おなじ方へいくのであった。
「なるほど。この唐の国のたいそう皇帝は、仏教にね
っしんな方ときいていました。わたしたちも、そこへ
行ってききましょう。」

観音さまと行者は、大法会のあると云う寺の方へ、
いそいだ。

「おししようさま、きょうの話は、こうふく寺の玄奘
法師だとのことです。」

「玄奘法師は、りっぱな人だときいている。どうであ
ろうな、惠岸、玄奘法師は、天じくへお経をとりにい
つてくれないだろうか……?」

「たぶん行ってくださるでしょう、あの方ならば、ど
んなくなるしいことがまんできましよう。」

観音さまは、おしゃかさまからおくられたけさを身
につけ、しゃくじょうついて立った。けさも、しゃく
じょうも、キラと光って、ほこりによごれたみなりは
まずしくて、どこか、とうとく見えた。これに気づ
いたものがいたのである。

「おや、あれはだれだろう。」

じっとみつめたのは、太宗皇帝たいそうにつかえる、えらい

役人であった。

「旅の人、おまちください。」

と、役人は、観音さまのそばへよって行って、云った。

「そのけざとしゃくじょうは、たいへんりっぱなもの
のようだが、わたしに売ってはくれまいか。」

「おのぞみならば、おゆずりしてもよろしい。だが、
すこしねだんがたかいですぞ。けさは五千兩、しゃく
じょうは二千兩。あわせて七千兩です。それでもよろ
しいかな？」

「七千兩か。なるほど、ちとたかいな。」と、役人は、
おどろいたように云う。

「たかいというなら、ただであけてもよい。もともと、
それにはのぞみがあります。この二品は、世にもとう
といものだから、これを持つねうちのあるりっぱな人
には、こちらから喜んでもらって頂いてもよいのだ
が……まず、これを持つ方に、あわせて頂きたい。」

「では、いっしょにきてもらいましょう。」

役人は、観音さまと恵岸行者をつれて、太宗皇帝の
ところへ行った。

「りっぱな品だ。」

けざとしゃくじょうを見て、太宗皇帝も感心した。

「わたしは、玄装法師を、えらい僧だと思っている。

その二品を持ってははずかしくはあるまい。おまえた
ちの云うねだんで、ゆずってもらうことにしよう。」

「いやそれにはおよびません。」

と観音さまは、にっこりわらって、

「あなたが、それほどまでにおっしゃるなら、このけ
ざとしゃくじょうをその方にさしあげます。」

そういって、けざとしゃくじょうをわたすと、行者
をつれて、さっさと立ち去ってしまった。

いよいよ、さかんな大法会がはじまって、そのちよ
うど七日目だった。

観音さまと恵岸行者は、こっそりおおぜいの人の中
にまぎれこんで、法会の場所にきていた。

その日も、高いたんの上に立った玄奘が、仏教のお
しえをといっていた。その話のとちゅうで、

「そのお話はちがっています。」と、いきなり観音さま
が大声でさげんだ。

観音さまは、おどろく人びとをおしわけながら、し
ずかに、高いたんにちかづき、ほんとうの仏教とはこ
ういうものだ、と、くわしく説明をしたのである。

「わたしのいったことに、まちがいはありません。た
だしい仏教を知ろうとするなら、天づくへいき、大雷

音寺のおしやかさまのお手もとにある経文きょうもんをおよみなさい。」

「おごそかな声に、そこにいた者はみんな、思わず、はつと頭をさげた。」

そして、一どさげた頭をあげたとき、こじき坊主だとばかり思っていた二人が、一人は観音さま、一人は

惠岸行者

のとうと

い姿にか

わって、

しずかに

天上への

ぼつてい

くのを見
送った。
「おお、も
つたいな
い。あり
がたい。」
みんな
手を合わ
せた。



観音さまと惠顔行者は天上へ



太宗と玄奘たちは頭をたれた

太宗皇帝

は、声を

はげまし

て云った

「観音さ

まのおこ

とばにし

たがって

だれか天

じくへ、

お経をと
りにいく
者はいな
いか。」
「そのや
くめを、
わたしに
させてく
ださい。」
玄奘法師
が、すす
み出た。
太宗皇帝
は、たい
へんよろ
こんだが
、玄奘法
師の弟子
たちのし
んばいは
たいへん
だった。
「天じく
へいく途
中には、
ばけもの
や、おそ
ろしいけ
だものが
いるそう
です。おや
めになっ
てはいか
がです。」

「それにあなたは、だいじなからだです。そのようなあぶないところへは、おいでにならないほうがよろしいのです。」

弟子たちは、いろいろ云ってとめるのだった。

「ほとけの道のためにいくのだ。とめてくれるな。かならずもどってくるから、そのようなしんばいをしないでよろしい。」

いちどきめた玄奘の心は、うごこうともしない。

「陛下、天じくへいってまいります。」

玄奘は、まもなく、二人の弟子をつれて、白馬にまたがった。

「途中きをつけてください。おお、そうだった。三つの蔵の経文をとりに行くのだから、これからは、三蔵法師と名のられるがよかるう。それから、これは観音さまからいただいたけさとしやくじょうです。途中でお役に立つこともありましよう。」

太宗皇帝はこういって、けさとしやくじょうをわたした。

「ありがとうございます。」

三蔵法師は、白馬の背にゆられながら、西へ西へとむかっていった。

長安から天じくまでは、遠い道のりで、いつになっ

たら、また長安へ、もどることができらう。どうぞごぶじでと、みおくりの人たちは、いつまでも手をふっていた。

三蔵法師とらにいどむ

昔の旅には、つらいことがたくさんあった。のりものは馬だけで、道はけわしく、川があれば、舟で行く外はない。山は足でのぼり、足でくだる。三蔵法師の旅のくるしみは長安をでたその日からはじまったのである。

馬がつかずいて、法師はがけからおちてしまった。

しかも、そこには、深い穴があった。

「やっ、法師さま、おけがはありませんでしたか。」

おとものふたりが、穴をのぞいているところへ、びゅーとなまあたたかい風といっしょに、ばけものがやってきた。あっとおどろくふたりを、ばけものは、ぱっくりとたべてしまった。

法師と馬は、穴の中いたので、いのちがたすかったが、穴から出ても、こんどは、おともの者はいない。こころぼそくてたまらない。そして、こんどは、ある山にさしかかった。



ゲバ棒と

仏教

一昨年の秋、アフガニスタンの首都カーブルで、市内見物をしようとしたところ、「いま市内で、大学生と軍隊が衝突して危険だから」と許されませんでした。そしてこの大学生達は、日本の大学生を真似ているのだというおりました。

然しさに、世界をにぎやかした、日本の反日共系の大学生が、紅衛兵をうわまわるような動乱を展開したのですが、そのおり大阪戦争で交番を焼打ちしたのは、高校生だといわれております。これは高校生が未成年者であるため、すぐ釈放されるという理由で、大学生が陰でこれを操っているのだとことですが、もし大学生より数の多い純真な高校生が、ゲバ棒や火焰ピンを振り廻すようになったら、それこそ大変なことになると思います。

終戦直後の事ですが、参議院で日教組系議員が、日本の歴史は勿論のこと、良い伝統まで破壊して国民の

共産化をはかるための、激しい演説をくり返しておりました。

もし学校の教師が、純真な青少年にこのような思想をうえつけたとしたら、将来日本は大変なことになると思つたことがあります。その演説のとおり現在これが表面化しようとしております。

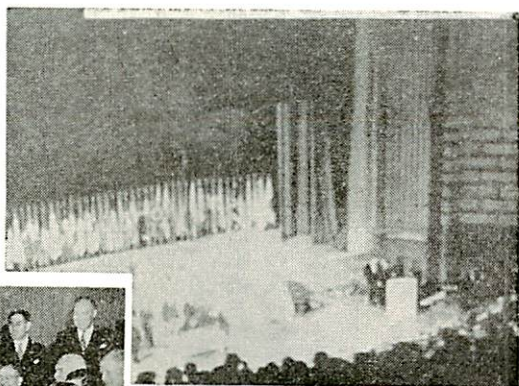
しかし、反日共系の各団体が主張している七十年闘争は、まだ何とか喰い止められるでしょうが、これと対立している共産系団体は、七十年代闘争というスロガンで、表面は一般国民の味方であるかのようにおとなしくしているが、七十年代のうちには、必ず共産革命をするという、ねばり強い裏面工作に努力しているのは、恐るべきことだと思います。

私が十数年前、金融事情視察のため米國を旅行した時、丁度サンフランシスコで、対日講和会議が開催されていたので、これを見学したことがあります。最後に吉田さんが条約書に調印して、参加した六十数ヶ國の国旗の列の最後に、日章旗が立てられたシーンには、傍聴していた日本人は皆感激の涙を流しておりました。

そしてその翌日公園のような美しい兵營の将校集會所で、日米安全保障条約の調印式にも立ち合いました

げたのだと思います。

終戦のときには敗戦国のかなしさに、朝鮮やドイツのように北海道を分割統治しようと主張



日米安保条約調印成立す



歴史的講和会議に於ける
日本代表の調印

が、この安保条約のお陰で日本が武力なしで今日のよきな発展をなしと

した国もあったのですが、米国や日本の努力で分割統治されずにすんだのは、実に幸運だったと、この七十一年の安保条約改訂の年を迎えるに当り、感深いものがあります。

今後の周囲の国際状況にかんがみ、武力なき日本には、安保条約継続こそぞましいものです。

余談ですが、私が米国に行ったとき、日本人二世によく世話になりましたが、その時「日本は米・ソなどの大国から、軍備の制限を強要されたり、物資の補給を封鎖されたりしたので、日本は戦わずして衰退するか、あるいは戦って敗れるか、どちらかの運命に追い込まれたので、大東亜戦をやったのは、日本の止むに止まれぬ措置だ」と異口同音にいていたので、わたくしも外国にいる同胞が、このように日本を愛し、理解しているのには全く感激したことがありました。

ご承知のごとく日本の産業の非常な発展と、国民所得の増加は、世界の驚異の的となっております。そのため外国では、日本人は経済飢鬼であるとか、数年後には日本の発展は世界の脅威となるであろう、などと悪評を受けております。

今春ハワイの友人山本芳雄氏から、次のような年頭の挨拶状が来ました。「(前略)一昨年は米大陸に参り

ました、昨年は訪日したいと考えておりましたのに、六月母が病気になって十一月に他界したので、訪日はあきらめました。日本は経済成長が世界一というので大変景気がいいようですが、近頃アメリカ人の間でも、日本人の商売のやりかたが厚かましいので嫌気がさしてきた様子です。貿易によって食っている日本人が、今のようによい気でしたら、世界中から嫌われてゆきずまるのではないのでしょうか、かつては軍国主義で嫌われましたが、今度は経済的ながめついで、ユダヤ人のようにハナツマミ者になりそうで心配です。万国博には行きたいと思っています。以下略」とこのように外から見て、日本の現状を批判し将来を心配しております。

このように日本人は、知らず知らずのうちに物質文明の虜（とりこ）となり、これに駆使（くし）されているので、そのため精神面すなはち日本人の良い伝統は消えうせ、ますます不具者（かなわもの）となり、遂に恐るべき破滅の壁につき当るのではないかと、心配しております。

動物は繩（な）弱（じやく）り根性が強く、これが強力になると、侵略を始めるという本能がありますが、人間は殊（こと）にこれが甚しく、人間の歴史が始まって以来鬭争（たうそう）が繰返えされておき、今でも地球の各所で流血の惨事をくりひら

げている厄介な動物です。

今こそ日本人は、日本の伝統（でんとう）の良いところを十分に活かして、立派な民主国家建設と世界平和のため、努力しなければならぬと思います。

これを達成するためには、一、学生暴力を英雄視しているかのような、一部のマスコミの扱い方は正、二、強力なる政治力、三、道徳教育の振興、四、宗教心の涵養（かんよう）等が重要だと思えます。

聖徳太子は、十七条憲法の第一条に「和をもつて尊しとす」と申されました。さすがに日本の釈迦如来と仰（おほ）まれる太子だけあって、仏教の真髓（しんすい）である、人との和（和）は輪で、輪は中心があつて、始めて廻転（くわんてん）する）が第一だといわれて、人類の弱点を指摘されていることは、痛快であります。

近年世界的に和の運動が盛んになってきた事は、結構なことです。この和の運動をもう上げることこそ、日本人の使命であると思えます。

私はささやかなものですが、三十数年前から郷里の名栗村に白雲山鳥居観音を建立しつゝあります。これは信仰心の厚かった亡母の遺言でもありますが、一面誰にでも親しまれるような、明るいお堂を建立して、自然のうちに信仰心の涵養（かんよう）に役立ちたい考えからでした

しかしこの白雲山を訪れる若い人達の多くが、観音堂の前を素通りするのは、終戦時占領政策として、日本の伝統を破壊する目的でとられた施策の影響が、現在の道徳教育に及ぼしている欠陥によるものでしょう。

すなわち物質文明に目をうばわれて、貪・瞋・痴いわゆる貪慾・羨望・愚痴の三毒に冒されつつあるのは、日本の良き伝統である天・地・師・親の四恩を忘れて、感謝する心のない個人主義になったためであります。

外国を旅行しますと、その民族がどこでも非常に愛国心を持つていることを見聞します。われわれ日本人としては、今のような世相に対し、大いに考えねばならぬと痛感いたします。

人類を破滅に導きつつある、現状を打破するために、この和の運動こそ一層高揚すべきであります。

又最近は「有難う」運動も盛んであります。まづ「有難う」という感謝の心が芽ばえれば、信仰の話にも素直に耳をかたむけることが出来るようになり、引いては平和な明るい社会をつくり、楽しい人生を送ることが出来ます。

印度のヒンズー教は、印度人の性格にピッタリ合うような、徳・財・性愛の三つを根本として、布教しております。ヒンズー教の寺院を見ますと、人間の本能

そのままの、あけっぴるげな官能的彫刻でうずまっています。これが神への帰依の高まりであり、いつか解脱の境地に達すると云っております。

しかし財は性愛（エロティズム）に優先し、徳は財・性愛に優先するというふうには、自然と深い信仰に導くように教導したため、ヒンズー教は印度人口の九十五％（仏教は僅かに一％）をしめており、その根強い狂信ぶりにはさすがの侵略的な回教も如何ともする事が出来なかつたのです。

日本の仏教も、日本の伝統を現代に生かして、大衆の心をとらえるような、すなわち「和」とか「有難う」とかの運動をますます高揚したなら、これまで老人仏教となりつつある仏教を救い、かつ日本人のゆきづまった心と物質のアンバランスを、なおすことが出来ると思います。

行事のあらまし

○物故恩師、役員各靈位特別法要

昨秋十一月十七日午前十時三十分より本堂に於て、左記物故せられた恩師、役員の各靈位の特別法要を、秋季例大祭に併せて営みました。ご関係のご家族を始

め、関係役員多数のご参列によって、そうごん、げんしゅくに執行出来ました。ご協力賜りました各位に心から感謝申し上げます。

物故恩師、役員各位芳名

水野梅晚老師	山田忍三殿	町田勝二殿
高階瑞仙殿下	内田男三郎殿	岡部佐平殿
三木宗策先生	田中梅吉殿	浅見仙之助殿
小川潮人先生	平岡仙之助殿	佐野義助殿
菊池寛実殿	平沼邦彦殿	
丹沢善利殿	岡部文太郎殿	

○除夜の鐘

除夜の鐘といえ、夕食後茶の間で、恒例によるテレビ番組、年忘れ紅白歌合戦を見ながら、心には去りゆく年をなつかしみ、くる年に希望をよせて、やがて放送される除夜の鐘を待つ気持は誰も同じだと思えます。新しい年をむかえようとする心は、祈り、反省、覚めとなって、打ちならされる鐘一つ一つに、ほんのうのほのおが消されていくでしょう。

当山でも恒例の除夜の鐘の行事を執行しました。午後十一時三十分本堂に集合、シャンドリヤの光彩は一そう心を引きしめます。有馬導師の美声の観音経に参

列者一同声を合わせて読経をする、鐘をうつ者、数える者、刻一刻とせまる去年今年へ、一九七〇年代への祈りと、今去って行こうとする年に理由なく感謝の目を閉じました。そして百八の鐘は零時十分に打ち終わりました。本堂の外からこの行事を拝んで去って行った幾組かの人もありました。

○盛んになった新年祈禱会

講元各位の御協力と、篤信の方の申し込みもあって元旦の祈禱は七百札を数えるにいたしました。家内安全が最も多く、次いで商売繁昌、交通安全、身上安全と云う順でした。午前十時から、三日まで謹修いたしました。四日からそれぞれにおくばりいたしました。

来年は一そう盛大にご利益を祈りたく存じます。どうぞ広く有縁の皆様のご御協力をお願いいたします。

鳥居観音のしおり 第十四号

発行日 昭和四十五年四月一日 每号定価貳拾円
編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三
発行人
印刷所 浦和市 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音

電話 ○四二九七〇四―二七五番

壹萬体観世音永代供養御志納金

A、金五千円 観世音像一体 身丈 三十三糎 正面阿弥陀如来壁面に奉安 五百体限り
B、金参千円 観世音像一体 身丈二十五・五糎 其の他の壁面全部え奉安

御申込みの方には、直ちにご仏壇に奉安する小観音像（一八・八糎）をお届け
します。

奉安総数 壹萬霊



基壇堂宇内壁面に奉祈される壹萬体観音

場所 白雲山鳥居観音境内

面白岩台上の霊地

基壇建物 二百平方米 高さ十米

三観音像 基壇建物の屋上に建立

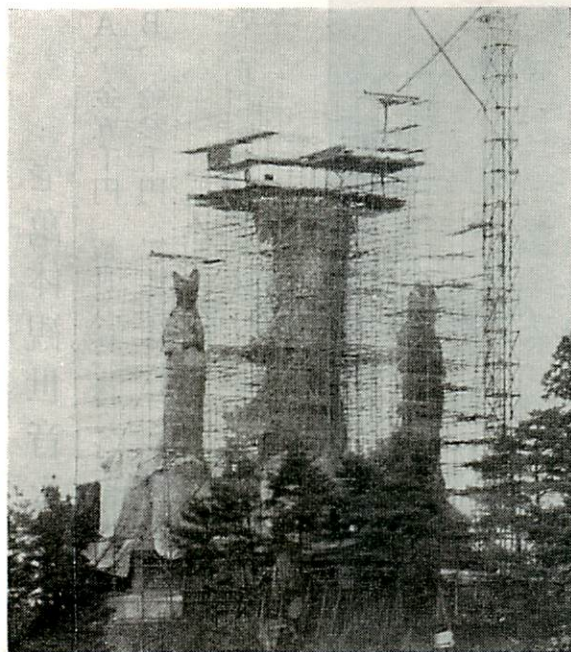
中央身丈二十二米

両脇侍身丈十二米

この基壇堂宇内には阿弥陀如来・葉師如来・吉祥天不動明王・十二神将などの尊像を奉安いたします。

この功德を広く有縁の方にも浴せられますよう各家のご先祖・有縁の霊位を謹記した壹萬体の観世音像を堂宇内壁面に奉安し永代回向を奉修いたします。この勝縁を逸することなきよう供養のお申込を謹んで勸進申し上げます。

ご縁故の方など広くご勧誘お申込み下さい。



建立中の大観音

この救世大観音建立地は、白雲山頂のも
 っとも眺望絶佳な、極楽浄土もかくやと
 思われるような、霊地でありまして、ご
 尊家祖霊さまを、おまつりなされるのに
 最もふさわしいところです。

皆様がここにご参拝されて、この風光に
 接せられることは、何よりの身心の良薬
 であり、果報を得られることでしょう。

ご尊家の永代供養のお申込を
 勤進申し上げます。

救世

観音

志
萬
体
観
世
音

白雲山 鳥居観音

永代供養

お申込みのおすそめ

白雲山

鳥居観音

埼玉県入間郡名栗村

電話名栗275番

鳥居観音東京事務所

東京都練馬区小竹町1-52

電話東京(03)955-0465番

お申込は、ご先祖代々の霊位か若くは有縁の霊名のどちらかを誌して下さい。

永代 供養料

A 金五千円 観世音像一体

B 金参千円 観世音像一体

A・B共にご家庭のご仏壇に奉安する小観音像をお申込み次第お届けします。

お申込・供養料お振込先

埼玉銀行 名 栗 支 店

普通預金口座

宗教法人 鳥 居 観 音

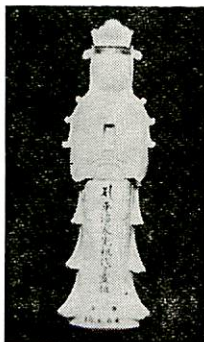
電話 名栗(〇四二九七〇四)二七五番

堂宇内壁面に奉祈される観世音像

ご家庭にお届けして
ご仏壇におまつりして
頂く小観世音像

裏 面

正 面



この小観世音像はA・B共にお届けします。

身丈 18.8 糎

観世音像

A 身丈 33 糎
B 身丈 25.5 糎

壹萬体觀世音永代供養申込書

扱者

供養御名
 〔何々家代々霊位
 ご戒名 霊位〕

施主ご住所

ご芳名

No.

No.

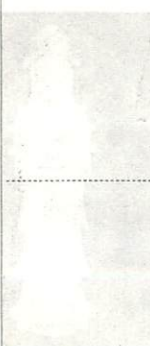
A. B

A. B

区分

お願い

ご縁故の方をなるべく多くご勧誘下さい。



白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図

棒の峰

写比羅神社

秋葉山

有間溪谷

面白岩

三蔵塔

見明台

白雲橋

三蔵塔

面白岩

三観音

大黒殿

白雲橋

三蔵塔

面白岩

三観音

子寶池

仁王門

白雲橋

三蔵塔

面白岩

三観音

稲荷神社

仁王門

白雲橋

三蔵塔

面白岩

三観音

稲荷神社

仁王門

白雲橋

三蔵塔

面白岩

三観音

駐車場



ますつり場

秩父正丸峠

観世音センター

水泳場

観世音センター前

八高線

こまがわ

至高崎

名栗川

川越

至八王子

飯能市

豊岡

所沢

新宿

池袋

浦和市

大宮市

大宮市

ご案内

これをもってご案内状にかえます

春の例祭

四月十七日

本堂ご法要 午前十時三十分より
おし の ぎ 午前十一時三十分より
三歳塔ご法要 午後一時

梅花流

御詠歌ご奉納 本堂にて
新縁のあひだに色とりどりの山つつじ
が皆様をご満足させます

救世観音上棟式

五月九日午前十一時より

境内面白岩台上の霊地の観音建立
現場において曹洞宗管長大本山総持
寺貫首岩本勝俊下導師により盛大
な上棟式を挙行致しますから

是非ご参列下さい

尚式場で粗餐を用意し もりだくさん
な行事もございますのでごゆるりと
白雲郷をご散策下さい